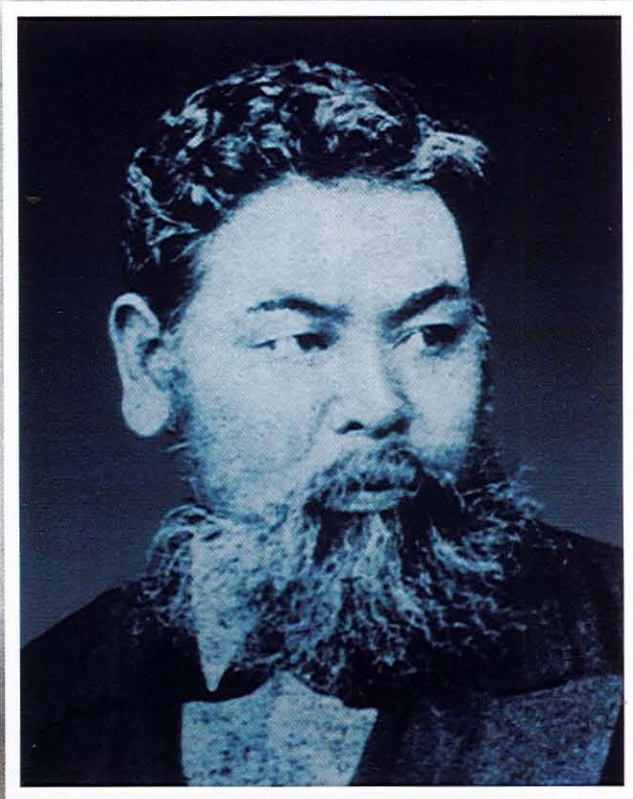


「大魚は小池に遊ばず・・・

幕末から新しい時代をみすえた！」



岸^{きし}
田^だ
吟^{ぎん}
香^{こう}



岡山県美咲町が生んだ
実業家・ジャーナリスト・教育家・慈善家
多くの顔をもった吟香

岸田吟香記念館

〈誕生から幼少年時代〉

吟香こと辰太郎 誕生

辰太郎(吟香の幼名)は、天保4年(1833)4月28日、旭川ダムに近い久米北条郡中坩和谷村(現美咲町柝原)で、百姓で造り酒屋だった父秀次郎、母小芳の長男(5男3女)として生まれる。

※岸田家は、三河拳母藩の飛地で坪井の取締大庄屋・安藤家の下部にあたる庄屋。



生家



吟香生誕の地 大瀬毘地区

ふるさとを離れ津山へ

辰太郎は幼い頃「神童」といわれ、4歳の頃にはすでに唐詩選(中国唐時代の漢詩選集)を暗唱していた。5歳のとき中坩和畝村(現美咲町中坩和畝)寶壽寺寺子屋で学び、12歳で坪井(現津山市坪井)の取締大庄屋・安藤善一(簡齋)のもとへ学僕として入った。以来2年間学問に励む中で善一(簡齋)は、ここで学ぶものはなくなったと津山城下に出し、津山藩の永田孝平や上原存軒に漢学を、矢吹正則に剣道を修めさせた。5年間みっちり学んだ辰太郎は、この間、高田村(現津山市大篠)善応寺で私塾を開き、村の青年に四書五経(儒学の基本書)や日本外史(日本の歴史書)などを教え自らも学問に励んだ。嘉永5年(1852)、辰太郎は19歳になっていた。

夢「大魚は小池に遊ばず」 江戸遊学を目指す

その年、辰太郎は安藤善一(簡齋)の計らいでふるさとを後にした。江戸に出た辰太郎は津山藩儒の昌谷精溪に入門、林図書頭の門下に移り最高学府の昌平黌でも学んだ。これら日本一流の漢学者に学んだ辰太郎は、ついに水戸や秋田藩邸で教鞭をとった。

安政2年(1855)、持病が悪化、ふるさとで静養することになり宿にしたのが久米南条郡別所村(現久米南町別所)叔母光元とりの家だった。辰太郎はここから中坩和谷村(現美咲町柝原)齊藤玄立医師へ通い、医師が経営する齊藤塾で学んだ。

全快後、「江戸遊学がしたい」と父に打ち明けるが猛反対される。叔母に将来の夢を話し、聞いた叔父辨次郎が父に掛けあってくれた。しかし許可が下りたのは大坂までだった。それでも大坂に出た辰太郎は、漢学者藤沢東咳や緒方洪庵に学んだ。

安政4年(1857)、九州方面からの帰り大坂に寄った昌平黌の先輩南摩羽峰に出会った辰太郎は、「江戸に出るのは今しかない」と両親に無断で羽峰の後を追った。

※拳母藩藩士(武士)、一転し三助に!

安政2年(1855)、武士に憧れていた辰太郎は、三河拳母藩(現愛知県豊田市)に認められ藩士になった。名を大郎、時には大郎左衛門と名乗ったが、万延2年(1861)、武士に嫌気がさし、「誰にも縛られず気ままに生きよう」と刀を捨てた。

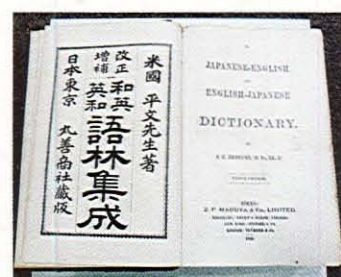
文久元年(1861)、経師屋「銀次」を名乗るが、食べていくためには左官の手伝いや湯屋の三助もやった。そこでも「銀次」と名乗り、周りから「ぎんこう」「銀公」と呼ばれた。以来、自らの名を「ぎんこう」「吟香」に改めた。

〈吟香が残した主な業績〉

「和英語林集成」と命名(日本初)

文久3年(1863)、眼病を患った吟香は津山藩蘭学者箕作秋坪から横濱居住の名医ヘップバーン(通称「ヘボン」)を紹介される。ヘボンは患者を無料で治療し、吟香もその一人だった。ヘボンはアメリカ人宣教師で語学者でもあった。キリスト教を広めるため和英対訳辞書を編集しており、農家で生れ武士でもあった吟香が様々な語学に精通していると知ったヘボンは、辞書の編集に誘う。ヘボンに憧れていた吟香は、対訳辞書に大変興味を持ち早速引き受け、以来、ヘボンの調剤を手伝いながら辞書の編集に励んだ。

慶応2年(1866)、出来上がった辞書を印刷するためヘボン夫妻と上海に渡り美華書館で取り掛かるが、日本語の鉛活字がなく仮名文字を示し職人に作らせた。慶応3年(1867)、吟香は完成したばかりの辞書を「和英語林集成」と命名した。



和英対訳辞書

邦字新聞「新聞紙」を創刊(日本初)

ヘボンから神奈川県領事館に勤めていた日系人ジョセフ・ヒコ(浜田彦蔵)を紹介され、このヒコから英語を習った。

元治元年(1864)、ヒコに誘われ本間清雄とともに邦字新聞「新聞紙」(民間新聞)を創刊した。ヒコが西洋の新聞から珍しい記事を探し、主に吟香が執筆した。当時、日本人は外国の出来事などまったく関心がなく、この新聞紙は翌慶応元年(1865)、「海外新聞」と改題し再発行された。

「横濱～東京間」定期航路を運航

当時、陸上交通が発達していなかった江戸に、旅客や貨物を移送する蒸気船「稲川丸」があった。慶応4年(1868)、この船を幕府が没収し、横濱の差配に吟香を、江戸の差配に松阪屋弥平衛を起用し運航した。

将来の海上交通に目をつけた吟香は、明治3年(1870)、政府から稲川丸を一万両で買い取り、横濱～東京間を巡行する定期航路を開設したが、明治5年(1872)、日本に初めて鉄道(新橋～横濱間)が開通したとき、定期航路は廃止、稲川丸は北海道開拓使(後に青函連絡船に利用)に売却していた。



引札「御免神奈川横濱行蒸気早船所」

水溶液目薬「精錡水」を販売(日本初)

当時、貝殻入り練り薬や水で溶く粉薬は、目になじまない、効能も薄いと言われていた。慶応3年(1867)、医師ヘボンが眼の治療に使用していた西洋の点眼水に目をつけた吟香は、ヘボンから製造方法を聞き、新しく水溶液目薬を製造、「精錡水」と命名し横濱で販売に乗り出した。

明治13年(1880)、国内に留まらず上海支店を開設、以来中国18省全土に支店を出し販売した。吟香は治療も行い、「東洋の先生」「吟香先生」と言われ親しまれた。



看板
「御目薬精錡水」

製氷会社を設立、販売(日本初)

医師ヘボン、患者の解熱用にアメリカから輸入した「ボストン氷」を使用し多くの患者を救っていた。明治2年(1869)、この氷に目をつけた吟香は、ヘボンから紹介された中川嘉兵衛と北海道に渡り、函館で製氷業を始めた。明治3年(1870)、五稜郭で天然氷を製造、明治4年(1871)に横濱氷室商會を設立した。以来、試行錯誤しながら天然氷を蒸気船で運搬、販売にこぎつけた。

石油掘削業は失敗

越後の七不思議「臭水」について、医師ヘボンは「ペトロリウム(石油)」だと言った。石油は精製し「ケロシンオイル(灯油)」となり、輸出してアメリカ経済を豊かにしていると知った吟香は、元治元年(1864)、石坂周蔵らと石油会社を設立した。明治2年(1869)、新潟県赤田村で採掘計画をするとともにアメリカから掘削用大型機械を輸入する準備を進めてきたが、資金難などから止むなく断念した。

日本語の平易化と大衆化(日本初)

絵入り新聞「横濱新報・もしほ草」など発刊していた吟香は、明治5年(1872)、條野傳平らと「東京日日新聞」を創刊、2号からは辞書印刷のため上海で作らせた鉛活字が使用された。これが日本で初めて新聞に採用された鉛活字となった。

明治6年(1873)、日報社(現毎日新聞社)は吟香の経験や執筆力を買い主筆に迎えた。吟香は、早速、自由論のキャンペーンに参加、その目的は、社会面の記事を漢字だらけの文語体から平仮名まじりの読みやすい口語体に改めることだった。以来、吟香は日本語の平易化と大衆化に貢献した。※慶應2年(1866)、上海滞在中に記録した吳淞日記に、「ひらかな書にして、日本の町人百姓でも、職人でも、をりすけ、雲助でもよめるやうにこしらへるつもり也」と残している。



東京日々新聞第736号

従軍記者(日本初)

明治7年(1874)、台湾で日本の漂流民が殺害された。これを聞いた吟香は記者として志願するが許可が下りない。野心強かった吟香は、軍の御用商人大倉組の手代となり台湾行の船に潜り込んだ。上陸後、現地の様子を自画像交えて本社に配信、一目瞭然その状況が把握できたことで吟香は世をあげて喝采を受けた。日本に戻った吟香は、日本初の従軍記者として慕われたが、この取材は自らが目論んだ戦地における従軍記者の必要性を説くものだった。



台湾新報第13号

多くの名(号)をもっていた吟香

吟香は、時と場所で名(号)を変えた。幼名は辰太郎、大郎、大郎左衛門、達蔵、弥子麻呂、清原桜、東洋先生、墨江桜、墨江岸桜、岸吟香、岸太郎、岸国華、墨江岸国華、吟次、小林屋銀次、岸田銀治、岸田銀次、岸田屋銀次、京屋銀次郎、岸田朝臣桜などがある。なお、明治31年(1898)以降、公式文章には「岸田吟香」と署名している。「吟香」という字は、陸放羽「吟到梅花句亦香」の句から使用したという説もある。号は吟香、東洋、桜草。筆名は吟道人。

「楽善堂訓盲院」を創設

日本の盲者はイギリスの3倍ともいわれた。医師ヘボンに博愛の精神を説かれた吟香は、眼病を患った経験から盲啞教育には特別深い関心をもっていた。明治8年(1875)、津田仙らと「楽善会」を結成、東京府知事の許可をもらうとともに目薬の販売収益を全額訓盲院の建設に注ぎ、明治12年(1879)、東京築地に完成、翌年に授業を開始した。その後、ろうあ者も入り「訓盲啞院」となり、明治18年(1885)には文部省直轄の「東京盲啞学校」と改称された。



東京築地訓盲院

明治天皇専属の記者

明治9年(1876)、東北・北海道を巡幸された明治天皇に随行、東京日日新聞に数十回にわたり掲載され多くの人を感動させた。翌10年(1877)には、第1回内国勸業博覧会を取材し、皇室の様子を同じく東京日日新聞に掲載した。この記事を見た随筆家宮崎三昧は、「吟香の観覧記は実に素晴らしい、天下一品だ」と激賞した。

明治11年(1878)、北陸・東海地方を巡幸された天皇のご様子を耳だけで聞き執筆した「風雨の中箱根を越ゆる記」は名文と言われ、吟香の執筆力の高さが伺える。

薬学会の発展と業者間の連携

目薬を通して製薬業界や売薬業界に信望を得た吟香は、明治13年(1880)東京売薬業組合頭取に、明治23年(1890)には全国薬業組合の会頭に就くなど多くの役職を歴任した。明治28年(1895)、日本薬学会編集委員となった吟香は、薬事新報や薬剤月報を創刊、医学的見地から薬学会を先導し業者間の連携を訴えた。

明治30年(1897)以降、学会の重鎮として製剤売薬界と日本医学の発展に尽した。

日清貿易の草分け

明治11年(1878)、東京商法会議所外国貿易事務委員となった吟香は、明治13年(1880)、上海楽善堂支店を拠点に清国で働く人を物心両面から応援、荒尾精が設立した日清貿易研究所にも参加した。明治29年(1896)には白岩龍平らと大東汽船株式会社を設立、横濱・上海間に航路を開業するとともに、明治32年(1899)には、日清経済同盟を提唱するなど、貿易により両国が相互に発展するよう訴えた。

東京商法会議所役員経験者 (31名中抜粋)

○渋沢 栄一 (第一国銀)	9	堀越角次郎 (太物問屋)	1
○福地源一郎 (日報社)	7	岩崎弥太郎 (三菱会社)	1
○益田 孝 (三井物産)	12	吉村甚兵衛 (洋酒商)	2
○大倉喜八郎 (大倉組)	6	川崎 正蔵 (川崎造船所)	4
三野村利助 (三井組)	2	笠野 熊吉 (不明)	1
渋沢 喜作 (生絲米穀商)	4	米倉 一平 (前・米商会所)	1
竹中 邦香 (米米商会所)	1	朝吹 英次 (三菱会社)	3
中山 穰治 (精工社)	5	平野 富二 (石川嶋造船所)	3
岸田 吟香 (売薬商)	3	安田善次郎 (両替商)	1

○印 会頭・副会頭経験者、数字は、延役員就任回数。参考「近代日本研究」

日清文化交流の草分け

明治21年(1888)、清国詩人に呼び掛け「玉蘭吟社」を設立、上海楽善堂支店を拠点に有力者や知識人、富豪らと交流した。

明治32年(1899)、重野安繹らと「善隣訳書館」を設立、世界の書籍を漢訳し清国に贈った。明治34年(1901)には人材育成機関「東亜同文書院」を創設し、天津に中日書院(大学)、漢口には江漢中学校を開校するなど若者の知日教育に力を入れた。東亜同仁会が医療法人となった明治36年(1903)にも、清国文化を東京で紹介するなど日清文化交流に尽した。

新聞広告の先覚者(日本初)

情報の伝達手段として新聞の波及効果を認知していた吟香は、慶應元年(1865)、「海外新聞」に広告を載せヒット。明治11年(1878)には広告専門紙「広告日表」を創刊した。また各社新聞に目薬「精錡水」の取次所を掲載、岡山県内でも山陽新報に掲載されバク売れした。翌12年(1879)東京日々新聞正月号では「燕尾服にシルクハット姿」の自画像を掲載、お得意様への挨拶と目薬の広告を行ったもので、自らが演出したこの広告は、日本初の個人広告となり人々の注目を浴びた。



自画像入り年賀広告

ハマナス油(香水)を鑑定

明治12年(1879)、北海道開拓使(国直轄行政機関)により洋式の香料と香水が造られた。その香料の原料には北海道石狩浜に咲く甘美な香りがする海辺のバラ「ハマナス」が使用された。銀座に楽善堂薬舗を開設していた吟香は、開拓使からの相談に応じ天然香料となる精油の抽出や鑑定、販売に至るまで様々な助言や協力を行うとともに自らも精製した。

参考：香り文化研究家 伊藤由起子

清国アヘンの撲滅

明治28年(1895)、京都で開催された薬物展覧会委員を務めた後、薬物の危険性を認識しアヘン撲滅運動に参画する。明治31年(1898)清国を訪問する伊藤博文に私費を投じ「戒煙医院」を設立したい旨の手紙を託し、明治33年(1900)にも北清事変後の患者救済事業を再開するよう伊藤博文に書簡を送った。明治34年(1901)には、清国訪問中の長岡護美に「アヘン病院」の建設を清国大官に説くよう依頼するなど清国のアヘン撲滅を訴え続けた。

吟香の死

製薬業や売薬業界から県知事や軍人に推薦されるが、縛られず自由に生きたいと断る。が、明治23年(1890)、全国薬業組合会頭に、明治30年(1897)には日本薬学会常議員となり薬業界の重鎮として日本薬学会を先導、業者間の連携に取り組むなど、いくら困難なことに対しても自らの信念を貫く人でした。しかし、胸の病には勝てず、明治38年(1905)6月7日、銀座楽善堂の自宅にて静かに息を引き取りました。72歳の生涯でした。

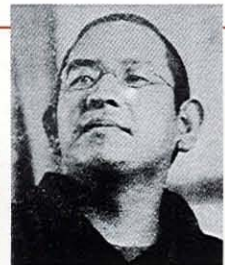
芸術的才能を継承する劉生、辰彌

岸田劉生、岸田辰彌、この二人の父親が岸田吟香です。

劉生は、日本近代美術史上屈指の洋画家として「麗子微笑」など傑作を残し、辰彌は、宝塚少女歌劇団の演出家として、「モン・パリ(吾が巴里よ)」を上演、その中で踊ったラインダンスを考案した人です。



五男辰彌



四男劉生

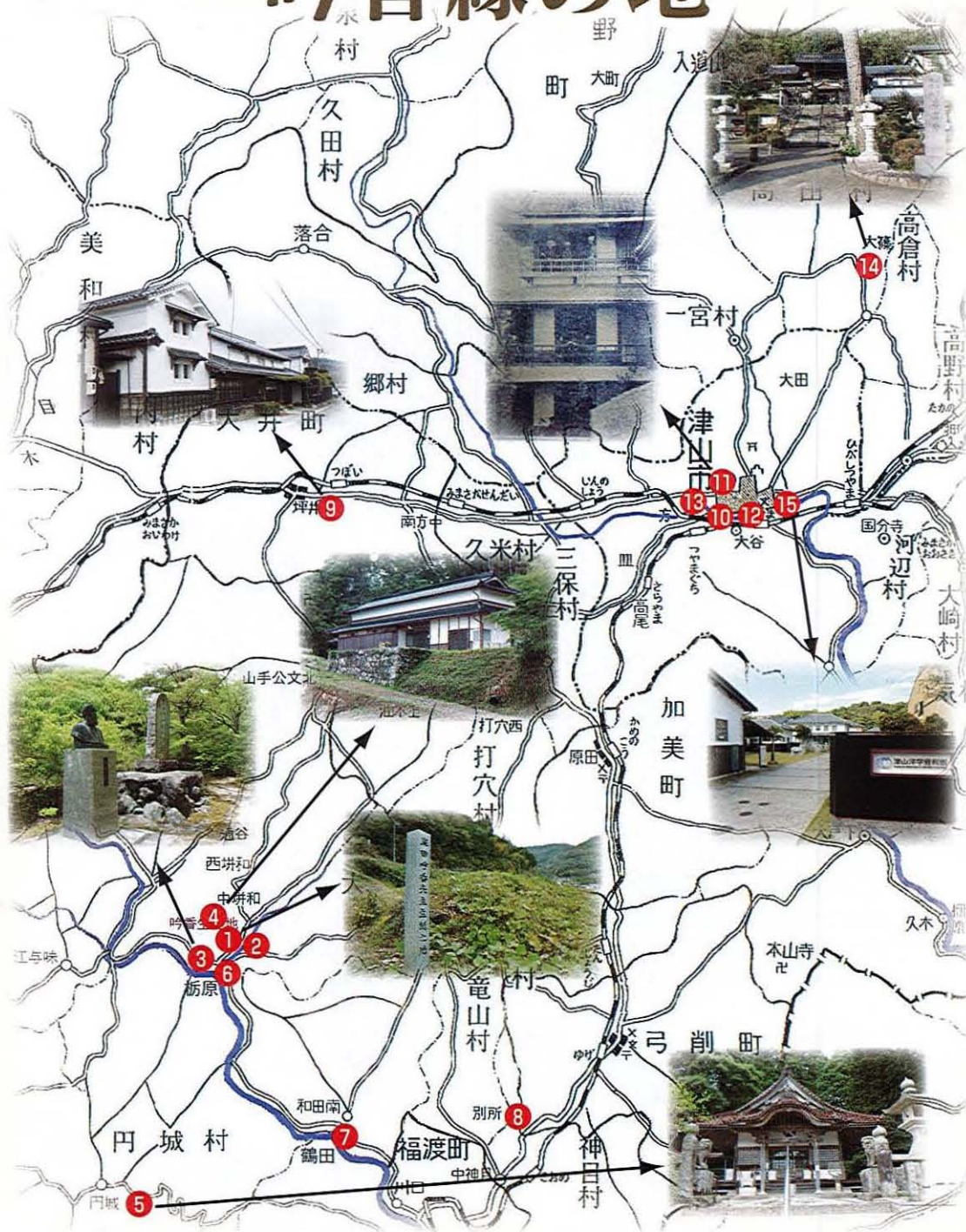


麗子洋装之図
(青果持テル)

モン・パリ 〈吾が巴里よ〉



ゆかり 吟香縁の地



- ① 生誕地跡 (美咲町栃原)：吟香(幼名辰太郎)生誕の地。
- ② 岸田家墓地 (美咲町栃原)：父秀次郎、母小芳が眠る。
- ③ 吟香記念碑 (美咲町栃原)：昭和26年(1951)顕彰会と津山市、津山記者クラブ、埴和村により建立する。
- ④ 寶壽寺 (美咲町中埴和)：5歳のとき住職が開いていた寺子屋があった寺院。
- ⑤ 円城寺 (吉備中央町円城)：提婆天護摩堂の壁に、落書き「深山大沢必出龍蛇 埴和住人」を残す。
- ⑥ 齋藤塾跡 (美咲町栃原)：齋藤玄立医師に持病(脚気)の治療を受けながら寺子屋で学ぶ。旭川ダム建設のため水没する。
- ⑦ 鶴田港跡 (建部町鶴田)：江戸往復に高瀬舟を利用した場所(舟着場)。
- ⑧ 光元家 (久米南町別所)：父秀次郎を説得した祖母としての嫁ぎ先。

- ⑨ 安藤家 (津山市坪井)：12歳のとき学僕として寄宿した拳母藩の大庄屋。善一(簡齋)の下で学ぶ。
- ⑩ 教諭場跡 (津山市小姓町)：津山藩により町人教育を行った場所。永田幸平や上原存軒、矢吹正則に学ぶ。
- ⑪ 武蔵野旅館跡 (津山市戸川町)：帰郷のとき宿泊した場所。叙勲祝賀会もここで行われる。「津山案内記」写真より。
- ⑫ 森本(源次郎)家跡 (津山市伏見町)：養蚕振興の世話方の一人で勤業掛だった。
- ⑬ 岸三省堂 (津山市本町)：江戸で知り合った友人(保治郎)、帰郷したとき看板の文字を描く。
- ⑭ 善応寺 (津山市大篠)：17歳のとき私塾を開き村の若者に四書五経(儒学の基本書)など教えた場所。
- ⑮ 津山洋学資料館 (津山市西新町)：幕末～明治初期にかけ活躍した宇田川玄随や箕作阮甫など津山ゆかりの蘭学者の資料を展示する。医師へボンを紹介した箕作秋坪の像もある。

岸田吟香記念館アクセスマップ



記念館までのご案内

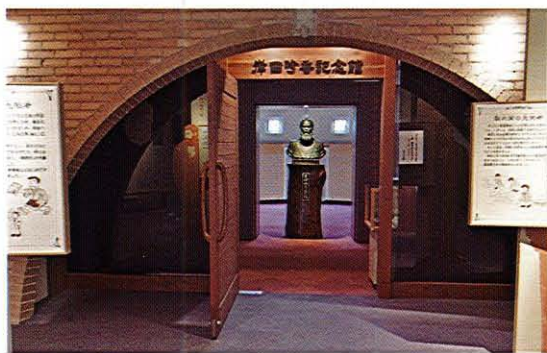
車で

中国自動車道	
津山I.C~	50分
院庄I.C~	35分
J R 津山線	
津山駅~	40分
亀甲駅~	30分
岡山空港~	50分

岸田吟香記念館

この記念館は、平成9年(1997)に建設された旭文化会館の一角に併設されたもので、岸田吟香に関する各種資料や、四男劉生(洋画家)、五男辰彌(演出家)に関する資料も展示しています。

岡山県美咲町は、岡山県の中北部に位置する人口約13,500人、世帯約6,000世帯の町で、平成17年(2005)3月22日、久米郡中央町、旭町、柵原町の3町が合併して誕生しました。



— たまごかけご飯 —

吟香がこよなく愛したたまごかけご飯、江戸生活研究彗星(昭和2年8月発行)に、旅先の朝食に手を付けず別に注文した鶏卵3~4個をご飯にかけ、カバンから焼塩と著椒を取りだし振りかけ食したという記事がある。吟香が全国に広めた「たまごかけご飯」、町内には西日本最大級の採卵場があり、食堂かめっち。1号店(原田)では行列ができる。



住 所: 〒709-3404
岡山県久米郡美咲町西川1001-7
電 話: 0867 (27) 9012
F A X: 0867 (27) 9013
E-mail: syougai@town.okayama-misaki.lg.jp(生涯学習課)
開 館: 10:00~18:00
休 館: 毎週月曜日、第3日曜日、月末・年末・年始
その他: 入場料無料、駐車場完備(30台)

出典 「岸田吟香の生家写真」杉山健二郎提供、「岸田吟香肖像写真」岸田正彦提供、「御免神奈川横濱行蒸気早船所」横浜開港資料館蔵、「東京日々新聞 第736号 明治7年」落合芳幾画、「明治7年6月10日台湾新報第13号」豊田市郷土資料館蔵、「自画像入りの年賀のあいさつ広告」(「東京日々新聞」明治12年1月4日):岸田吟香記念館蔵、「東京築地訓盲院写真」筑波大学附属学校教育局蔵、「麗子洋装之図(青果持テル)」豊田市美術館蔵、「モン・パリ(吾が巴里よ)」写真 阪急文化財団提供、「武蔵野旅館写真」津山観光協会蔵

発行 美咲町教育委員会生涯学習課
(岡山県久米郡美咲町原田1735)
(☎0868-66-3086)



監修 岸田吟香を語り継ぐ会

